

稲生沢川水系河川整備基本方針論点整理表（水系の特徴）

静岡県河川審議会
（平成26年度第1回）
稲生沢－資料－2

河川及び流域の現状

河川及び流域の概要

- ・稲生沢川は、下田市に位置する流域面積74.4km²、流路延長15.1kmの二級河川である。
- ・稲生沢川は、娑婆羅山に源を発し、支川と合流しながら下田市をほぼ真東に貫き、稲梓川と合流した後、ほぼ真南の進路を変え、蓮台寺川、敷根川、平滑川と合流し下田港へ流入する。
- ・稲生沢川流域近傍の石廊崎気象観測所における過去10年間（平成15年～平成24年）の年平均降水量は1,785mmで全国平均の1,610mmを上回る。
- ・河口から5.0k付近までは1/600～1/350程度の緩勾配であり、沿川は宅地が広がっている。また、5.0kより上流は1/250～1/100程度で、周囲は主に農地として利用されている。稲梓川合流点（9.0k）より上流は1/100以上の急勾配の急流河川である。
- ・稲生沢川流域の土地利用は、山林・原野が9割を占めており、宅地やその他が1割である。なお、下流部は伊豆半島南部を代表する下田市の中心市街地に位置し、国道、伊豆急行など主要交通インフラが川に並行して整備されており、中上流部では昭和51年と比べ宅地化が進んでいる。
- ・下流の市街地には古からの歴史を語り継ぐ寺社、幕末の開港にまつわる史跡をはじめ観光施設等が多く存在する。
- ・稲生沢川流域の人口は、昭和53年の約2.2万人をピークに減少しており、平成26年では約1.5万人となっている。一方で、世帯数は平成9年の約7,500世帯をピークに減少に転じ、平成26年の総世帯数は約7,200世帯となっている。
- ・下田市総合計画では、「景観や生態系に配慮した安全な水辺空間の整備」を基本目標として掲げている。その施策として、浸水の多い地区での雨水対策、未改修河川の治水対策、景観に配慮した水辺空間の保全、緑地や遊歩道の整備、河川を身近に感じる水辺空間の整備などを計画している。

治水事業の沿革と現状

- ・稲生沢川流域では、過去数回にわたって豪雨災害や台風災害が発生しており、平成に入ってから平成3年や平成10年に洪水被害を受けている。
- ・既往洪水の中でも甚大な被害であった、昭和51年7月の豪雨では、床上浸水1,372棟、床下浸水539棟などを被っている。
- ・平成3年の局地的豪雨では、下流部での降雨は少なかったものの、上流部で大雨となり、内水被害や土砂災害が発生している。
- ・河口付近（右岸側）で高潮による浸水被害や支川の平滑川沿いの住宅地で内水被害が頻発している。
- ・稲生沢川水系では昭和51年7月の豪雨被害により「河川激甚災害対策特別緊急事業」に採択され、稲生沢川の河口から5k付近までと蓮台寺川を対象に河川改修が行われている。その後、稲生沢川では稲梓川合流部までやさらに上流区間の改良事業が実施された。一方で、蓮台寺川以外の支川では抜本的な改修は進められていない状況である。
- ・稲生沢川河口部では不法係留船が多く確認されており、洪水の流下阻害や河川工事の実施の支障を引き起こすため、不法係留船に対する措置が必要である。また、不法係留船は、景観の阻害や、一般公衆の自由使用の妨げになっている。
- ・静岡県第4次地震被害想定で稲生沢川では、施設計画上の津波は河川堤防を越えて約1.7km遡上するとともに、最大クラスの津波では河川及び海岸堤防を越え、沿岸部で約120haの浸水が想定されている。

河川の利用及び住民との関わり

- ・許可水利権として水道用水1件の利用がある。慣行水利権としては農業用水13件の利用がある。
- ・漁業権を有する団体は、稲生沢川非出資漁業協同組合であり、稲生沢川本流において第5種共同漁業権が設定されている。稲生沢川ではアユ釣りが盛んであり、沢端橋、深根橋、落合浄水場付近が釣りのポイントになっている。
- ・河川空間の利用として、地元の小学生を対象とした川の自然観察会や3月には蓮台寺駅周辺で「あまご祭り」や河口より5.0kmの「お吉ヶ淵」で「お吉祭り」が開催されるなど、市民との関わりが多い。
- ・地域住民に親しまれる護岸として、階段護岸が設置されている区間もあり、市民の休憩所・憩いの場としても利用されている。
- ・支川の平滑川には、ペリーロード（黒船でやってきたペリー提督が仙寺で日米下田条約締結の為に進んだ道）があり、石畳の道が続き、伊豆石やなまこ壁の家並み、柳並木が独特の風情を醸し出している。
- ・静岡県では、地域全体で身近な環境保護への関心を高めることを目的とし、リバーフレンドシップ制度を推進しており、稲生沢川においてもリバーフレンドとして河川清掃や除草、草花の植栽等の活動が行われている。

河川の環境

- ・稲生沢川はA類型を目標としている。近年の水質調査結果からBOD値（75%値）は、環境基準を満たしており、現在の水質は概ね良好である。
- ・稲生沢川の河川水は、水道水として利用されている。
- ・稲生沢川流域における生活排水については、公共下水道整備と合併処理浄化槽の設置により対策を講じている。下田市では、平成26年4月時点で公共下水道接続率は68.8%となっている。
- ・下流区間では感潮区間を有するため、シマサキやボラなどの汽水・海水魚が多い。また、静岡県版レッドリストにおいて絶滅危惧IA類に指定されているシロウオや、準絶滅危惧のカマキリなどが確認されている。
- ・支川蓮台寺川が合流する中下流区間において、蓮台寺川上流より流入する温泉水による影響により高水温となり、冬季においても魚影が見られ、グッピーやカワズメなどの温水を好む外来種が確認されている。
- ・ヒアリングでは、特定外来種であるナガエツルノゲイトウの侵入が指摘されている。

水系の特徴（着眼点）

下流部は昭和51年の水害を契機として改修されたが、中上流部では近年、宅地化が進んでおり、**河川の氾濫等が発生した場合の被害は大きくなる**ことが懸念される。

第4次地震被害想定に基づく地震・津波対策については、港湾管理者など関係機関と連携し、**地域住民との合意形成を図りながら、必要な対策を検討**していく必要がある。

河口部には不法係留船を含め、**多くの船舶に係留され、洪水の流下阻害や、津波による流出などが懸念**されている。また、**景観的に好ましくない状況も見られる**。

観光地であることから、災害が発生した時には住民とともに、**観光客の安全確保にも配慮**していく必要がある。

漁業権が設定され**アユ釣りが盛ん**であるが、頭首工など横断工作物が多く、アユ等の**生物の移動を阻害しない工夫**が必要である。

平滑川沿いにはペリーロードが整備され観光名所となっており、本川河口部においても、**街並みと一体となった景観や利用に配慮した川づくり**が必要である。

リバーフレンドシップ制度を活用した河川美化活動など、**流域全体で地域密着型の取り組み**が行われている。

本川の水質はA類型を概ね満足しているが、下田市の**水道や農業用水の水源**にもなっていることから、引き続き**良好な水質を維持**していく必要がある。

下水道整備は進められているものの、**市民の満足度も51%と高くなく、さらなる整備が望まれる**。

シロウオやメダカ、カマキリなど多様な動植物が生息・生育しており、これら**生物の多様性を確保するための環境を保全・創出**していく必要がある。

河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

河川整備の基本理念(案)

河川整備の基本方針(案)